

☆「連携・共有・協力」をテーマに実践したICT共有教材の作成と、その指導法も含めた自主的教科内研修を重ねた教科全体における授業改善の提案☆

◆ 所属・提案者（◎代表者）

県立伊奈学園総合高等学校

◎金田 智・辻 香織・尾花 美代子・
本田 育子・岡地 由紀子・有吉 俊樹

ねらい

生徒数約2,400人、職員室が5つある本校では、同じ科目を教える教師も10名以上いるなど、授業の進め方の情報交換をするのも大変である。教師がそれぞれ独自のプリントを作る中で、共通テストを作成し、生徒に身に付けさせたい力の共通認識を持つことが課題であった。またICTの使用や授業方法の議論などについても、教師間のコミュニケーションを取ることが難しく、課題であった。

教科全体でのICT教材も含めた共有教材の作成と、その指導方法まで含めた教科内研修と研究協議を行うことで、生徒の確かな学力を育成し、より多くの言語活動を授業の中に取り入れていく。

実践内容

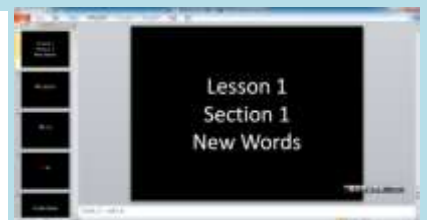
★本実践は、3年間での到達目標をもとに、生徒に身に付けさせたい力の共通認識を図り、共有プリントの作成（ICT教材含む）、指導法の改善、定期考査の見直しも含めた総合的な教科の取組である。

- ① 3年間での到達目標を確認し、各学年でそれぞれどのようなステップを踏んでいき、どのような力を生徒に身に付けさせていくのかを確認する。*資料1
- ② 定期考査の問題を教科全体で見直し、生徒にとって定着するべき力が明確になるように観点別出題の共通理解を図る。
- ③ プロジェクトチームを結成し、共有プリントを作成する。
その際、生徒にとって予習・復習の内容が明確になるように工夫する。*資料2
- ④ 授業中の板書時間を削減し、出来る限り多くの言語活動を取り入れるために教科で共有のプロジェクト教材を作成する。*資料3、4
- ⑤ 教科内研修会を開き、実際にプロジェクターを利用した授業展開を公開し、全体で協議しながらその指導法の改善や情報交換を行う。
- ⑥ 教科内で授業公開週間を設け、授業公開のための教科内時間割を作成して実施する。最終日には全体での研究協議を行い、教科全体での授業改善を図る。

資料1

資料2

資料3



資料4



教科内研修：年間3～5回程度（4月、5月、8月（2回）、10月）
教科内授業公開週間：2月中に1週間程度（最終日に2時間の研究協議）
実践期間：3年間

実践時期・期間

実践の成果や課題

【成果】

実践前には、英語に対して「何を勉強していいのかわからない」「英語は嫌い」という生徒が多くいたが、実践中及び実践後には、そのような生徒はほとんどいなくなった。また先生方がそれぞれに行っていたプリント作成の時間が無くなり、より多くの研究授業や協議を行うことで、授業内での言語活動およびその時間が飛躍的に増えた。また教科内授業公開および研究協議を行うことで、多くの先生方の授業に触れることができ、教師がお互いに学び合いながら授業改善をしていくことができた。

定期考査においても、実践前はその平均点に毎回大きなばらつきがあったが、実践後は、年間を通してその平均点の差が10点未満となった。教師にとっても生徒にとっても、授業で身に付けるべきことが明確になったことがその理由である。

【課題】

3年間を通じて共有プリントや共有のICT教材等を作成し、その指導法も含めた教科内研修を行うことで、多くの先生方が授業でプロジェクター等のICT機器を使用するようになったが、本校が所有するICT機器の台数に限りがあるため、予定していた授業でICT機器を使用できないという場面があった。また、共有教材があることで、先生方の負担が大きく軽減されたことは間違いないが、その分共有教材が出来あがるのを「待ってしまう」先生方が出てきてしまった。最後に、共有教材を利用した指導方法や定期考査の観点別出題等について、先生方の異動に伴い、人が入れ替わっていく中で、教科内研修の継続的実施の必要性を感じた。

失敗しないための方策

- 教師一人のアイデアを押し付ける形ではなく、教科全体でアイデアを共有していくと良い。公開授業週間の後の研究協議でも、どの先生どの部分が良かった等、認め合う姿勢が大切である。
- 研修会での意見交換はもちろん有意義ではあるが、平日頃から授業についての情報交換ができると良い。

他校で導入するポイント

- 校内LANにおける教科内フォルダを作成し、全ての仕事を教科内フォルダで行うことで、各先生方のプリントの改善について共通理解が得られ、必要に応じて基本的な共有プリントの改善にもつながる。
- 「共有教材・プリント」としてただ使用するのではなく、その効果的な指導方法も含めて、丁寧に研修会を重ねるとより効果的である。

左から：書画カメラ、プロジェクター、
bluetoothスピーカー（充電式）



- 教科全体で授業改善を行うことで、学校全体の生徒の確かな学力の育成につながる。
- 教科全体での共有教材を作成・利用することで、各教師の教え方の違いによる生徒の戸惑いが無くなり、3年間を通して予習・復習の内容も含めて生徒はスムーズに家庭学習及び授業に取り組むことができる。
- 自主的教科内研修を多く行うことで、多くの先生方の意見を取り入れた形で共有教材を作成することができる。また必要に応じて一部変更等が出来る基本的な共有教材を作成することで、各教師の裁量も残すことができる。

セールスポイント

こうすればより高い効果が得られる方策など

- 到達度確認テストである定期考査ごとに、どのような力を生徒に身に付けさせたいかを明確にして、そのための共有教材を全体で協議・作成し、実際の定期考査に反映していく。そうすることで生徒にとっても予習・授業・復習のサイクルの中で何を身に付けていくかが明確になり、英語学習に対する動機づけにもつながる。
- プロジェクターの共通教材だけでなく、bluetoothスピーカーや書画カメラ（教材提示装置）の研修会を開くことで、更に先生方の授業改善に対するモチベーションが高まる。

外部有識者からのコメント

課題が明確になっていて、校務の削減という視点からも共有できるプリントの作成や教材の開発等、チームとしての授業改善への取組の視点がよい。

英語科担当教師による連携、協力、共有による授業改善の機会が多分に包含されている取組である。こうした実践を他教科に広げるためにはどのような方法をとったらよいか学校全体で考える必要があるだろう。